『赤染衛門集』の四天王寺参詣歌群について：『四天王寺縁起』から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-05-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉田, 実 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6854

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

大妻女子大学紀要―文系―　第五十二号、令和二（二〇二〇）年三月

『赤染衛門集』の四天王寺参詣歌群について

―『四天王寺縁起』から―

倉田　実

【キーワード】　寛弘四年、聖徳太子、極楽浄土東門、四天王寺西門、仏舎利

はじめに

『赤染衛門集』に詠作年時は特定できないが、四天王寺参詣にかかわる歌群（五二八～五四〇）がある。ここには、寛弘四年に発見されたとされる『四天王寺縁起』[1]（『荒陵寺御手印縁起』『四天王寺御手印縁起』とも）の内容が深くかかわっていると思われる。『相模集』にも四天王寺参詣にかかわる歌群（一～九）があり、『四天王寺縁起』の影響に関してはすでに論じられている。[2]しかし、『赤染衛門集』については、宗教史からの指摘はあるものの、[3]『赤染衛門集全釈』[4]や『和歌大系　赤染衛門集』[5]などに言及がない。そこで、この小論でいささか『四天王寺縁起』とのかかわりを検討していきたい。

以下、『四天王寺縁起』を確認し、この歌群を歌番号順に見ていくことになる。ただし、五三七番歌以降は、四天王寺を出てからになるので、割愛したい。なお、引用部で「天王寺」とあっても、正式名の「四天王寺」と表記する。引用文献の原典は、論末に記したが、表記を一部私に変えた場合もある。

一　『四天王寺縁起』

『四天王寺縁起』は、鎌倉時代初期の東大寺僧宗性上人書写本に次のような奥書にあることで、人々に知られるようになったと考えられている。

寛弘四年八月一日、此縁起文出現、都維那十禅師慈運、金堂六重塔中求出之。

この記事以外に当時の様子を記した文献はなく、これが唯一の出現史料となっている。この信憑性が問われるわけだが、当時の四天王寺信仰のありようが、この『四天王寺縁起』の内容と符合するので、寛弘の発見とすることは支持されている。

内容的には『聖徳太子伝暦』所引の『本願縁起』と同じになるが、今日では、四天王寺の衰退を食い止めるべく住僧が発見を偽装したとされている。しかし、奥書には、聖徳太子自撰である旨が記されており、当時はこの記載が信じられていた。

乙卯正月八日、皇太子仏子勝鬘、この縁起文金堂内に納め置く。

濫りに披見するべからず。手跡みだるるなり。（『四天王寺縁起』）

「皇太子仏子勝鬘」が聖徳太子自身である。御手印があり、聖徳太子自撰とされたことで、縁起は尊崇の対象となって多くの写本が作られていった。また、その記述が四天王寺と聖徳太子に対する信仰のありようを導くこととなった。本稿で重要なのは次の部分になる。

・　斯処昔釈迦如来転法輪所、尓時生二長者身一、供二養如来一、助二護仏法一、以二是因縁一建二立寺塔一。（同）

・　宝塔、金堂相二当極楽土東門中心一。以二髻髪六毛一、相二加仏舎利六粒一、籠二納塔心柱中一。（同）

前者は、四天王寺のある地は、釈迦如来が転法輪した所であり、その折に自分は長者の身として生まれていて、釈迦如来を供養し、仏法を守護した。こうした因縁がこの地にあるので、寺塔を建てたとしている。釈迦如来の転法輪の地であるとして聖性を喧伝したのである。

後者は、四天王寺の宝塔、金堂は西方極楽浄土の東門の中心に当たり、聖徳太子は髪の毛と仏舎利を塔の心柱の中に納めたとしている。極楽浄土の東門が言われることで浄土思想に接近し、金堂や宝塔が仏舎利信仰の対象となる所以が示されたのである。極楽浄土の東門が言われたことで、やがてこれに対応する四天王寺の西門[6]が信仰の対象になっている。これも四天王寺の仕組んだ信仰であったが、人々に浸透していくことになった。

西門信仰の次第は、次のような問答体の記述が示唆的である。念仏門に入ることを勧める、大治三年（一一二八）成立の珍海による『菩提心集』である。

問　天王寺の西門の念仏は尤すべき事か何にぞや。

答　尤すべき事なり。

問　たゞ閑かならん処にて西に向て念仏せば、何れの所なり共さてありぬべし。あながちにえりくり参りたりとて何事かは有べき。貴き寺、止ごとなき聖の跡其数あり。天王寺の西門ならんからにかならず念仏の処になむてあるべきかは。若太子の御跡をいはゞ法隆寺、橘寺も同じ事にはあらずや。

答　太子の御跡いづくよりも芳ばし。わが家は西方にありと宣へる救世観音出おはしまして仏を始め行ひ給へり。爾る聖の御跡をだにも尋ずしては、いづこか求むべきや。太子の御跡の中にも天王寺これ異なる処也。御手の璽し給へる縁起の文に、宝塔金堂は極楽の東門の最中にあたれりと記されたり。しかれば東門に向かはんとて西門へ参ることはりなり。

問　極楽は広き国。仏大きに人いやしからず。其東門はかならず天王寺一つにや当らんずる。又かの国の東の門唯ひとつのみやはあるべき。此大宮だにも十二の門を開ける者をや。

答　極楽いまだ見ぬ処。但聖の御言によるべし。さとりありがほに箇様の事いふもいとしもなき事なり。しかれば国ひろけれとも東門はせばくもあらん。門はおほかれども此国の人の入るは一つにてもあらむ。然れば天王寺の西門を出て極楽界の東門に入んに直く向ひて行けば往生の正しき道とすべし。これ想ひを勧むる道なり。又外なり共想ひをすゝめば足りぬべし。（『菩提心集』一三～四頁）

「天王寺の西門の念仏」の重要性が説かれている。聖徳太子創建とされる法隆寺や橘寺よりも、四天王寺が格別であることが、招来された救世観音と、「御手の璽し給へる縁起の文（『四天王寺縁起』のこと）」によって保証されている。そして、「天王寺の西門を出て極楽界の東門に入」る道筋も確認されている。この時点で四天王寺西門信仰・聖徳太子太子信仰が確立していることが知られるのである。

四天王寺信仰は、先に示したように仏舎利信仰とも結びつけられていた。西門の他に、仏舎利は宝塔のほかに金堂にも納められており、引き続き信仰の対象となったのである。さらに次節で見るように、聖霊院・亀井・拝み石・塔の露盤・念仏所も信仰されるようになる。

『四天王寺縁起』発見によって寛弘期から新たになったこうした四天王寺信仰のありようを端的に提示しているのが、これから検討する

『赤染衛門集』や『相模集』の四天王寺参詣歌群なのである。冒頭で触れたように『相模集』については、『四天王寺縁起』が参照されているが、『赤染衛門集』での検討は不十分である。以下、赤染衛門以外の人々の参詣を参照しながら、『四天王寺縁起』が深く『赤染衛門集』にかかわっている次第を見ていくことにする。

二　四天王寺参詣歌群

それでは、順次『四天王寺縁起』とのかかわりを主にして四天王寺参詣歌群を検討していこう。なお、最初の二首は、途次の景物を詠んだ歌であり、この縁起とは無関係である。

①　天王寺に詣でしに、長柄の橋を過ぐとて
我ばかり長柄の橋は朽ちにけり難波のことも古るるかなしき（五二八）

訳　自分だけが生き長らえて、長柄の橋は朽ちてしまったことだ。難波のことも、何事も、古くなるのは悲しいことだ。（注・「長柄」に「（生き）ながら」、「難波」に「何は」を掛ける。「古るる」のは「長柄の橋」と「我」）

四天王寺参詣は、多く山崎から難波津まで舟に乗るので、長柄橋を通り過ぎる。長柄橋は恰好の歌枕であった。このために、四天王寺参詣、あるいは住吉参詣で長柄橋が詠まれることになる。後代の例を挙げておく。

天王寺に詣ではべりけるに、長柄にて、ここなん橋の跡と申すを聞きて、詠みはべりける
行く末を思へばかなし津の国の長柄の橋も名は残りけり（『千載集』雑上・一〇三〇・源俊頼）

②　住吉にて
末の世はあせもしぬらん住吉のまつそのかみを見たらましかば（五二九）

訳　末の世には、神意は褪せもして見えるだろう。住吉の松が、真っ先に創建当時の神を見ていたならば。（注・「松」に「まづ（まっさきに）」、「神」に「上」を掛ける）

末法の世となる永承七年（一〇五二）以前の詠と分かる歌である。赤染衛門は長久二年（一〇四一）まで生存が確認されている。四天王寺と住吉社は近いので、両者に参詣することも多い。ここも後代の例を挙げる。

俊恵、天王寺に籠りて、人々具して住吉に参りて歌詠みけるに具して
住吉の松がね洗ふ波の音を梢にかくる沖つ潮風（『山家集』一〇五四）

③　西大門にて、月のいと明かりしに
ここにして光を待たむ極楽に向かふと聞きし門に来にけり（五三〇）

訳　この西大門で入日の光を待とう。極楽に向いていると聞いた西門に来ていることだ。

ここからが四天王寺での詠歌になる。南大門ではなく、西門の歌から四天王寺詠が始まっているのは、わざわざここから境内に入ったからである。十一世紀前半には、西門に対する信仰が、日想観ともかかわって、すでにあったのである。これが『四天王寺縁起』をとかかわっていたが、ここには西門には触れられていなかった。再掲する。

宝塔、金堂相当極楽土東門中心。以髻髮六毛、相加仏舎利六粒、籠納塔心柱中。（『四天王寺縁起』）

宝塔、金堂が、極楽浄土の東門に相当するとされただけである。極楽の東門に向かうために、宝塔、金堂とは逆の方向に進むことになり、西門が信仰の対象になったのである。往時の四天王寺の西側は、すぐ近くまで海であった。その様子は『一遍上人絵伝』に描かれている。

海の彼方に「極楽の東門」を幻視したことであろう。そうすると歌は、「極楽の東門」に向かいあっていると聞いた「四天王寺の西門」に来ていることだと詠んだことになる。

西門には、藤原彰子や頼通もわざわざ来ていた。

酉の時ばかりに、天王寺の西の大門に御車とどめて、波の際なきに西日の入りゆくをりしも、拝ませたまふ。（『栄花物語』第三十一「殿上の花見」巻・二〇九頁）

彰子の場合で、長元四年（一〇三一）九月二十八日のことになる。「西の大門」から入るようにして、ここで車を停めて、波間に沈む入日を拝んでいる。極楽往生を念じる日想観である。なお、彰子の参詣時と赤染衛門の参詣時は、道程が違うので別々であった。

入二御西大門一之比、寺家楽所忽発二音声一、応二聖霊之廟意一、賀二希代之（光カ）先臨一也。於レ是召二御手水一、先令レ礼二西方一給。古人之所レ伝当二極楽之東門一云々。（『高野山御参詣記』）

頼通の場合で、永承三年（一〇四八）十月十九日のことになる。頼通は彰子の時に同行しており、二度目の参詣である。やはり西門にまず来ている。ここは「極楽之東門」に当たるので、西の方角の「希代之光」を拝んだのである。彰子と同じようにしているのである。

西門信仰は、多く日想観と結びついていた。四天王寺の西門信仰については別稿[7]も用意しているので、ここでは二首ほど挙げておきたい。

寛弘の御時ばかりにや、天王子の歌とて人々詠む折がありしに、西大門

極楽に向かふ心は隔てなき西の門より行かむとぞ思ふ（『相模集』一）

天王寺にて、ところどころの名、人々詠みしを、西門

さはりなく入る日を見ても思ふかなこれこそ西の門出なりけれ（『郁芳門院安芸集』五六）

『相模集』で「寛弘」とあるのは、この四年に『四天王寺縁起』が世間に知られたこととかかわっていよう。その影響を示す最初の史料であり、また『四天王寺縁起』になかった西門信仰の存在を示す最初の史料ともなる。『四天王寺縁起』を受けて人々が「天王子の歌」を詠み合ったことが想像できよう。西方浄土まで隔てるものがなく続く西門から行こうと思うと詠まれている。東門のことは隠されて、西門が詠まれている。早くに西門信仰が成立した事情が想定できよう。

安芸の歌は赤染衛門と同じく、西門信仰と日想観が共に詠まれている。このありようは、今日まで継続している。海岸は遠くなったが、西の鳥居に沈む夕日は、今も見ることができる。その原型的信仰を示すのが赤染衛門や彰子、頼通の場合になる。国母や関白がこうした四天王寺参詣をしたことが、大きな影響をもたらした事態も想定できるのである。

④　聖霊院に夜更けてまうでたりしに、御灯の明かく見えしに

世を照らす法の灯なかりせば仏の道をいかで知らまし（五三一）

訳　この世を照らす法灯がなかったならば、仏の道をどのようにして知ることができたであろうか。

聖霊院の聖霊は、聖徳太子の聖霊の意で、これは聖徳太子像を祀るお堂をいう。太子堂とも言われ、太子の霊夢を見て、往生の安心を得ようとするのであり、太子信仰の浸透によって作られている。法隆寺では、天仁二年（一一〇九）創建とされているので、四天王寺はそれよりも早い。『四天王寺縁起』に触れられていないので、その出現に応じて早々に作られたのかもしれない。

上宮太子聖霊檜皮葺大殿一宇四間。（『太子伝古今目録抄』所引『大同縁起』）

なお、聖霊院は、聖徳太子の墓があるとされる、大阪府南河内郡太子町にある叡福寺の号にもなっている。

赤染衛門は夜が更けてから参籠し、灯明を奉り、その光を見ている。これも供養の一つになる。この光景は、暗夜に光明を見るということであり、これも信仰の形であった。頼通も西門、金堂に続いて聖霊院

に参っている。

次令レ礼二聖霊院一給、則太子之影堂也、仏法之赴有レ之、（『高野山御参詣記』）

聖霊院に参るのは、「太子之影堂」だからである。

灯明ではなく、指灯という、身を削る最高の供養の仕方があった。

沙門仙命は、丹波国の人なり。（略）往年四天王寺に詣でて、聖霊堂の前にして、手の中指を灯にして、尊像を供養せり。紅燭の光の前に、青竜上に現ず［太子手印記に云はく、荒陵池に竜あり、伽藍仏法を守護すべし、云々といふ］。（『拾遺往生伝』上・九）

仙命は極楽往生を念じて、聖霊院の尊像を供養するために指灯をしている。それに聖徳太子は感応したのであり、「太子手印記」（『四天王寺縁起』）に記されていた青竜が現れたのである。

なお、聖霊院で絵解きをしたらしい記録がある。

今日参二聖霊院一欲レ令レ説レ絵、（『台記』久安四年九月二十一日）

この「絵」は、聖徳太子絵伝のようなものであろうか。そうだとすると、聖霊院はふさわしい場所になる。赤染衛門が聖霊院に参籠するのも、聖徳太子信仰の現われなのである。

⑤　舎利、拝みたてまつるとて

分かちけん昔にあらぬ涙こそなほさりながらかなしかりけれ（五三二）

訳　釈迦入滅後に分骨したという昔の人が流したのではない涙であっても、通りいっぺんに舎利を拝み申し上げると、やはり悲しいことであった。（注・「なほさりながら」に「なほざりながら」を掛け、この「さり」に「舎利」を掛ける）

仏舎利は、聖徳太子がもたらしたとされる仏宝で、四天王寺信仰の中心を占めている。こうなったのも、繰り返すが、『四天王寺縁起』の影響であった。ここには三カ所に仏舎利のことが示されている。

・宝塔、金堂相二当極楽土東門中心一。以二髻髪六毛一、相二加仏舎利六粒一、籠二納塔心柱中一。

・宝塔壹基　五重瓦葺　心柱中籠二仏舎利・髻毛一。

・金堂壹宇、二重瓦葺　（略）金銅舎利塔形壹基　納二入舎利拾参粒一（『四天王寺縁起』）

仏舎利の安置は宝塔になるが、四天王寺では、宝塔と金堂に置かれていた。赤染衛門は金堂で拝んでいよう。後世にかけても、仏舎利信仰は、金堂が主になっている。金堂に参ったとあれば、仏舎利を拝むことになる。

仏舎利は、道長も拝んでいる。

午時御二四天王寺一。於二別当権少僧都定基房一供二御膳一。覧二仏舎利一畢。（『扶桑略記』治安三年（一〇二三）十月二十八日条）

道長が仏舎利を拝んだ場所は示されていないが、金堂になろう。

仏舎利を歌に詠む際は、荼毘にふしたことから詠む傾向があった。赤染衛門の「分かち」も荼毘の後の分骨を言っていた。その他、二、三挙げておく。

仏舎利

灰消えてわかちしたまもつとむればいとど光ぞ数まさりける（『相模集』五）

天王寺にまゐりて、舎利を拝みたてまつりてよみ侍りける

薪尽き煙も澄みて去りにけんこれや名残と見るぞかなしき（『千載集』釈教歌・一二〇九・瞻西上人）

天王寺にまゐりて、遺身舎利を礼してよみ侍りける

常ならぬためしは夜半の煙にて消えぬ名残を見るぞうれしき（同・一二五四・天台座主明雲）

右で、傍線部が荼毘、波線部が仏舎利を指示している。なお、『千載集』の明雲の歌の結句は、新大系（龍門文庫本）では「かなしき」にしている。瞻西にも「かなしき」があるので、こちらの方が妥当であろう。

仏舎利信仰で特異なのは、自然に生じることである。右の相模の歌の「光ぞ数まさり」は、光る回数がまさるの意ではなく、供養のお勤めをしていれば、光る舎利の数がまさるということであろう。

大臣（蘇我馬子）此寺ニ塔ヲタツ。太子ノヽ給ハク、塔ハコレ仏舎利ノウツハ物也。尺迦如来ノ舎利自然ニキタリナムト。大臣コレヲキヽテ祈ニ、斎飯ノウヘニ仏舎利一ヲエタリ。ルリノツボニイレテ、塔ニオキテオガム。（『三宝絵』中・聖徳太子）

右は『聖徳太子伝暦』に依る『三宝絵』から引用した。この寺は四天王寺ではないが、仏舎利に対する信仰が記されている。塔は仏舎利の器なので、釈迦如来の舎利は自然に来るものだとされている。この信仰が、四天王寺で極まるのであり、聖徳太子でなくても参籠して念じると舎利が出現することもあった。『拾遺往生伝』『後拾遺往生伝』を編んだ三善為康が体験している。

天王寺に参りて、念仏の行を修せり。九ヶ日を経て、百万遍に満ちぬ。時に往きて金堂に詣り、舎利を礼し奉る。即ち祈請して日く、吾が順次往生の願、弥陀現前の夢、倶に虚妄にあらずは、舎利併せて出現したまふべし。もし然にはあらずは、顕現したまふことなかれ。救世観音・護世四王・太子聖霊・護法青竜、同じく証明すべしといへり。かくのごとく再三祈請して、舎利を写し奉れり。瑠璃の嚢の裏に、金玉の声あり。予合掌して念じ、眼に寄せて見れば、舎利三粒、数に依りて出現せり。予歓悦の涙不覚にして下り、随喜の人期せずして多し。（『拾遺往生伝』上・序）

四天王寺は、西門の他に仏舎利で人々の信仰を集めたといっても過言はない。右以外でも、多様な文献で仏舎利信仰のことが記されている。また、右の祈願は『四天王寺縁起』の範疇にあるものであった。

⑥　亀井を見て

劫を経てすくふ心の深ければ亀井の水は絶ゆる世もあらじ（五三三）

訳　亀の甲ではないが、長い時を経て衆生を救おうとする仏の心が深いので、掬いあげる深い亀井の水は絶える時もあるまい。

（注・「劫」に「甲」、「救う」に「掬う」を掛ける）

亀井の水のことは、『四天王寺縁起』発見以前から知られていたようである。

白石玉出水ト云ハ。出水ハイヅミ也。白石ヨリ玉ノコトクニ漲テ出タル水ト云歟。東山記云。纔飲二亀井水一者。遂往二大悲遊所一。云云。保胤修行記云。法水東流。掬二亀井泉一。云云。（『太子伝古今目録抄』）

右によると、慶滋保胤の「修行記」に、「法水東流。掬亀井泉」があるという。「修行記」は未詳だが、慶滋保胤が亀井の水のことを記していたとしたら、それは『聖徳太子伝暦』所引の『本願縁起』によっていよう。

麗水東流。号日二白石玉出水一。以二慈悲心一飲レ之。為二法薬一矣。（『聖徳太子伝暦』所引『本願縁起』、『四天王寺縁起』）

『太子伝古今目録抄』の「白石玉出水」の場合は、『四天王寺縁起』によっているかもしれないが、『本願縁起』と同じなのでここでは問わない。とにかく、亀井の水に対する信仰は、寛弘以前にも認められるが、それが人々に広まるのが、『四天王寺縁起』発見からとなろう。

今日でも亀井堂に、金堂の地下より湧く水があり、「白石玉出の水」と呼んでいる。この水に聖徳太子が影を宿したとする伝承によって、亀井堂の東側を、影向の間としている。その伝承のもとは不明だが、次の歌はその証であろう。

(1)　亀井

千代過ぎて蓮の上に上るべき亀井の水に影は宿さむ（『相模集』二）

(2)　天王寺へ参りて亀井の水を見て詠みける

浅からぬ契りの程ぞ汲まれぬる亀井の水に影うつしつつ（『山家集』八六三）

二首とも「影」を詠み込んでいる。この「影」は、聖徳太子が亀井の水に映した意と、自身の姿の意を掛けていよう。亀井の水に対する

信仰も、聖徳太子が影を宿したとする記述は『四天王寺縁起』にないものの、ここから導かれるがごとくに起こっていたと思われる。

(3) 亀井の水には、道長・彰子・頼通の三人とも訪れている。

また天王寺に参らせたまひては、太子の御有様あはれに思さる。妹子の大臣のゐてたてまつりたまひける御経は、夢殿に、閼伽机の上に置かせたまへり。われ取りにおはしましたりけるは、うせたまひける日、やがて先だちたまひにけり。亀井の水に御手をすまして拝みたてまつらせたまふ。(『栄花物語』第十五・うたがひ・一九七頁)

(4) 二十九日に還らせたまふついでに、亀井の水のもとに寄らせたまひて、御覧ずるほどに思しめしける、

濁りなき亀井の水をむすび上げて心の塵を濯ぎつるかな

(『栄花物語』第三十一「殿上の花見」巻・二〇九頁)

(5) 秉燭還御之次御覧亀井水。(『高野山御参詣記』)

(3)は治安三年(一〇二三)十月、道長の高野詣での際、(4)はすでに見た長元四年(一〇三一)九月、彰子の石清水八幡宮・住吉神社詣での際、(5)もその箇所で扱った永承三年(一〇四八)十月、頼通の高野詣での際になる。(4)は、『金葉集三奏本』、『新古今集』、『続詞花集』にも収載されている。この他の亀井の水を詠んだ歌をさらに挙げておく。

(6) 天王寺に詣でて、亀井を

万代をすめる亀井の水やさはとみの小川の流れなるらん(『弁乳母集』二)

(7) 天王寺に詣でて亀井にて詠める

劫をふときえじとぞおもふ露にても亀井の水に結ぶ契は(『清輔集』四二四)

(8) 我が心亀井にすめど西へ行く月の舟にぞのりうつりぬる(『頼政集』六四八)

(6)は(3)の折の歌。(7)の初句はわかりにくく、『清輔集新注』[8]のように「こふふとも」がいいかもしれない。多く清冽な水にちなんで、縁語となる「澄む」「澄ます」「濁りなき」、あるいは「汲む」「掬う」「濯ぐ」などが使用されている。(2)(7)の「契」は来世の約束になる。(7)の「劫」は、亀の「甲」との掛詞になる。亀井の水も、新たになった信仰なのである。

⑦ 太子の額づきたまふとて、ひたぶるにあてたまひける石を見て立ち居ける跡を見るこそかなしけれ石やその世にあへらましかば(五三四)

訳 太子が立ったり、坐ったりして拝んだという石の跡を見るのは悲しいことだ。すばらしく石がその世にあった太子生前に会えていればよかったのに。(注「石」に、すばらしい意の「いし」を掛ける)

詞書に「ひたぶるにあてたまひける石」とされているのは、「拝み石」のことで、聖徳太子が額をつけて拝んだという伝承によっている。この石も四天王寺の聖徳太子信仰の一環であった。現在の四天王寺境内にも「四石(しせき)」と呼ばれる四つの石がある。金堂の「転法輪石」、西門の「引導石」、南門の「熊野権現礼拝石」、東門に「伊勢神宮遥拝石」になる。「転法輪石」が「拝みの石」になりそうだが、この石は金堂ではなく、塔の前にあるとされている。

・ 三伏蔵。皆石蓋覆之。(中略)一者廊未申角塔前在レ石。此其蓋也。或云二御拝石一也云々。(『聖徳太子伝私記』下)

・ 次塔前在レ石。此名二御拝石一。或云三廊未申角伏蔵之蓋一。此伏蔵二ハ銅瓦一万埋之。此当寺料也。(同)

同じような記述になるが、要は、塔の前にある石は、伏蔵を覆う石蓋で、それを「拝み石」とも言うとなろう。この「拝み石」が、聖徳太子を偲ぶよすがになっていた。二例ほど歌を挙げておきたい。

拝みの石

拝みける印の石のなかりせば誰か昔の跡を見せまし(『相模集』

七）

この寺を拝む印の石の上に堅く契を結びけるかな（『拾玉集』巻三・二七八五）

相模と赤染衛門の歌には「跡」が詠まれている。拝み石は実感的に聖徳太子をしのぶことができるアイテムなのである。

⑧　塔の露盤の黄金、太子塗りたまひて、「この光失せん折、仏法も薄べし」と誓ひたまひけるが、曇りて見えしに磨きけん黄金の色も曇りつつ法の光も消えぬべきかな（五三五）

訳　太子が磨いたという塔の露盤の黄金色も曇り曇りして、法の光も消えそうであることだ。

「塔の露盤」は、塔の上部の相輪の基部となる方形の盤のことで、相輪を含めて言う場合もある。ここは前者になる。わざわざこの部分が詠まれたのは、『四天王寺縁起』にその記載があるからであった。

宝塔第一露盤、誓手鏤金。表遺法興滅之相。（『四天王寺縁起』）

塔の露盤は太子自ら磨いて、その光沢で法の道が興隆するか滅していくかを表そうとしたとされている。「この光失せん折、仏法も薄べし」とあるのは、「遺法興滅の相を表す」を言うのであろう。赤染衛門が露盤を見てみると、曇って見えたと言う。曇りは法の道の衰退を意味する。末法の世を控えているので、曇って見えるのでもあろう。露盤は相模も詠んでいた。

塔の露盤

磨きける黄金変はらぬ塔をこそ君が肌への形見とは見れ（『相模集』四）

相模は「磨きける黄金変はらぬ」と詠んでいる。赤染衛門は「黄金の色も曇りつつ」であった。相模が見た後に曇るような事態が起きたのであろうか。それは、多分に末法に入るとする時代意識が、そのように見させたのかもしれない。いずれにしても『四天王寺縁起』がなければ、意味不明になりかねない歌であった。

⑨　念仏すとて起き明かす暁に、鳴の鳴くを聞きて夜もすがら我が取る数の乱るるを鳴の羽がきかきやつくらん（五三六）

訳　一晩中わたしが数え取る数珠の数が乱れるのを、鳴が羽がきで掻いて書きつけるのであろうか。（注・「掻き」に「書き」を掛ける）

一晩中念仏しようとした暁に詠んだ歌である。すでに四天王寺での念仏は西門で盛んであった。その西門近くには、念仏所も作られていた。院政期には、念仏所はしっかりとした施設になっていた。

入二御西大門一、以二内念仏所一、為二禅閣御休所一。（『台記』康治二年（一一四三）十月二十日条）

頼長が父禅閣忠実に随行した折である。西門内の「内念仏所」が忠実の休所にされている。念仏所は、源俊頼『拾玉集』にも見られる。

ことぢと云ふ歌うたひ、念仏所にて夜もすがら歌うたひて、きりじといふあさ経よみなどせしを、伊賀入道聞きて、興に入りて我が門といふ催馬楽うたひなどして忘れがたくして思ひ給ふ事を、門向かひとよみ侍りしことなどを思ひいでられけるにや、上りて後、入道のもとより歌三首を詠みて遣したりける

行きやすくつとめてゐたる極楽の門向かひこそ思ひ出らるれ

思ひやれ秋のきりじの法の声立居につけて忘れやはする

澄み上る夜のことぢは松風を聞く心地して身にぞ染みにし（『拾玉集』六五三～六五五）

この念仏所と、『台記』の「内念仏所」は、同じ施設であろうか。西門念仏の初期の史料として、五三六番歌は貴重であろう。

続く四首は、四天王寺を出た後になるので、引用だけにとどめたい。

⑩　帰るに、風のいと荒くて、いしべといふ所に泊まりて日ごろあるに、雁のなきしを

波間待つ舟は泊にやすらへど風にはへてはかりぞきこゆる（五三七）

⑪　水鳥のおほくうかびたる所をみて

水鳥のうきてうき世をすぐすだにいく世のせぜをこころみるらん（五三八）

⑫　ともなりしさぶらひの、あの寺にて、にはかに亡くなりにしに、帰るに声もせぬがあはれにて

出でてこし日やはかぎりと思ひけん帰るにかはる魂だにもなし（五三九）

⑬　夜にとく車にのりて京に入る程に

かひひろふうらは何ともみえねどもみやこのかたみうれしかりけり（五四〇）

おわりに

以上、『赤染衛門集』に詠まれた四天王寺の、西門・聖霊院・金堂仏舎利・亀井の水・拝みの石・塔の露盤・念仏所について見て来た。『相模集』では亀井の水・舟・塔の露盤・仏舎利・弓・拝みの石・黒駒・池の蓮が詠まれていた。重なる部分とそうでない部分に分かれるが、総じて『四天王寺縁起』の影響下で詠作されていたと言えよう。いずれも摂関期に高まった四天王寺信仰・聖徳太子太子信仰が窺われるのであった。

これらの信仰は、院政期になってさらに高揚していくことになる。その代表が鳥羽院であり、『台記』でその様子を見ることができる。そして、それは中世に引き継がれる。四天王寺を軸にした宗教史が可能なのであろう。

注

（1）『四天王寺縁起』については、赤松俊秀「四天王寺の書跡」（『秘宝四天王寺』講談社、一九六八・一）、平岡定海「四天王寺の成立と四天王信仰の受容」（『日本寺院史の研究』吉川弘文館、一九八一・七）、榊原史子『『四天王寺縁起』の研究――聖徳太子の縁起とその周辺』（勉誠出版、二〇一三・三）などを参照した。

（2）近藤みゆき「平安中期和歌における聖徳太子伝受容――流布本『相模集』天王寺題和歌を中心に」（『王朝和歌研究の方法』笠間書院、二〇一五・四）。武内はる恵・林マリア・吉田ミスズ『相模集全釈』（風間書房、一九九一・一二）にも『四天王寺縁起』に言及がある。

（3）注（1）の榊原著に同じ。

（4）関根慶子・阿部俊子・林マリア・北村杏子・田中恭子『赤染衛門集全釈』（風間書房、一九八六・九）

（5）武田早苗『赤染衛門集』（和歌文学大系、明治書院、二〇〇〇・三）

（6）四天王寺の西門については研究が多い。平岡定海「四天王寺の成立と四天王信仰の受容」（『日本寺院史の研究』吉川弘文館、一九八一・七）、菊地勇次郎「天王寺の念仏（上下）」（『日本歴史』94、95、一九五六・四、五）、出口常順「四天王寺の歴史」（『秘宝四天王寺』講談社、一九六八・一）、赤松俊秀「四天王寺の書跡」（『秘宝四天王寺』講談社、一九六八・一）、岩崎武夫「四天王寺西門考」（『文学』一九七四・九）、梅谷繁樹「四天王寺西門信仰をめぐって」（『中世遊行聖と文学』桜楓社、一九八八・六）、植木朝子「四天王寺西門信仰と今様――『梁塵秘抄』一七六番歌をめぐって――」（『日本歌謡研究』47、二〇〇七・一二）、榊原史子『『四天王寺縁起』の研究――聖徳太子の縁起とその周辺』（勉誠出版、二〇一三・三）などを参照した。植木論には、西門にかかわった作品が引照され便益である。また、四天王寺にかかわった往生人たちについては、久保田淳『天王寺と往生人たち』（西尾光一教授定年記念『論纂説話と説話文学』笠間書院、一九七九・六）に整理がある。

（7）拙稿『『更級日記』の薬師仏と阿弥陀仏――東方浄瑠璃浄土の西門を出て西方極楽世界の東門に入る――』（和田律子・福家俊幸編『更級日記　上洛の記千年』武蔵野書院、二〇二〇・四予定）

（8）芦田耕一『清輔集新注』（清簡社、二〇〇八・二）

出典　『四天王寺縁起』は注（1）の根本本の翻刻、『聖徳太子伝暦』『太子伝

『赤染衛門集』の四天王寺参詣歌群について

古今目録抄』『聖徳太子伝私記』は大日本仏教全書、和歌は『新編国歌大観』、『菩提心集』は浄土宗全書、『栄花物語』は新編日本古典文学全集、『三宝絵』は新日本古典文学大系、『高野山御参詣記』は続々群書類従、『拾遺往生伝』は日本思想大系、『台記』は増補史料大成、『扶桑略記』は新訂増補国史大系を使用した。